

#### 四、約三法明

一。本文。「向説遠離我心貪著自身、遠離無安衆生心、遠離供養恭敬自身心。此三種法、遠離障菩提心応知。」

一。この節は、遠離の三法を結んで無障心に帰するのである。即ち、遠離我心貪著自身、遠離無安衆生心、遠離供養恭敬自身心の三法の名と、無障の一心とが、互いに名義撰対することを示されるのである。この三種の法の成就によつてのみ、菩提に於いて無障を成就し得るし、この三種にして成就せずば、菩提に於いて三種の障碍となることを示されるのである。

ここに挙げられたる、我心貪著自身、無安衆生心、供養恭敬自身心の三種心は、菩提を障碍する心である。即ち、我心貪著身とは、凡夫の身見であり、無安衆生心とは、二乗の自調孤度心であり、供養恭敬自身心とは、凡夫の名聞利養の心である。第一と第三とは、凡夫の二惑であつて、生死に住する心であり、第二は、二乗の涅槃に住する心である。凡夫の無明煩惱によつて生死に住する心と、二乗の大悲を失つて涅槃に住する心とは、真実の菩提心の障碍である。一は自利を欠ぎ、一は利他を失う。自利利他一如の柔軟心によつてのみ菩提心の成就することは、既に説かれたが如くである。故にこの三種心を遠離する三法は、無障の一心を成就するのである。

一、本文「諸法各有障碍相。如風能障静土能障水湿能障火、五黒十悪障人天四顛倒障声聞果。此中三種不遠離障菩提心」

#### 示障相

一、論主の意を解したまうのである。まず、諸法に悉く障碍の相あることを示して例知せしめられるのである。

風能障静

土能障水

……………・喩

湿能障火

五黒十悪障人天

……………例

四顛倒障声聞果

此中三種不遠離障菩提心……………法

五黒とは、善を白、悪を黒という。五黒とは五逆のこと。五逆に小乗と大乘との二種あり。小乗の五逆とは、一、殺父、二、殺母、三、殺阿羅漢、四、破和合僧、五、出仏身血。大乘の五逆とは、一、寺塔を壊し経蔵を焼き、三宝の財物を盗む。二、三乗の法を謗り、聖教を粗末にす。三、僧侶を罵り責め使う。四、小乗の五逆。五、因果を揆撫し、十悪を行す。已上の五逆及び、殺生、偷盜、邪淫、綺語、妄語、悪口、両舌、貪欲、瞋恚、愚痴の十悪を行ずれば、人天の果報の障碍となる。

四顛倒とは、顛倒とは、常道に違背し、正理に順応せざることを、大経下巻に「顛倒上下、無常根本」とあり。或は、いわゆる邪見のこと、即ち、事理の真相に契合せざる誤謬の見解をいう。この顛倒の邪見を略して、倒見と云われ、又妄想顛倒、虚妄顛倒と熟字となして用いられる。皆邪見のこと。

論註には「いわゆる凡人天の善果は、若は因、若は果、皆是れ顛倒なり、皆是れ虚偽なり是故に不実功德と名く」と云い、又「哀なる哉。衆生この三界に締れて顛倒不浄なり」とあり。皆是れ邪見を示されたのである。

四顛倒とは、凡夫の四倒は、無常を常とし、苦を楽とし、無我を我と執し、不浄の世界を清浄となし、生死界の無常、苦、無我、不浄を悟らざること。二乗及び菩薩の四倒とは、涅槃の常、楽、我、常の四徳に於いて、常を非常、楽を非楽、我を非我、浄を非浄となして、涅槃の四徳に対して倒見を懐くことである。

是の如く、今菩薩の菩提を求むるに、上の我心貪著自身、無安衆生心、供養恭敬自身心の三種心を遠離せずば、菩提の碍げとなることを示されるのである。

一。本文。「応知者。若欲得無障 当遠離此三種障碍也。」  
积応知

一。以上の三種心は、菩提を得るの障碍である。応知と論主の言うは、この三種心の障碍を除かぬ限り、菩提心の成ぜざることを知るべしとのたものである。

我等は、この三種の障碍について聞きつつ、深い内省に誘われるものである。この三種の心ある限り菩提心の成就せざることを思う時、到底、自力の菩提心は成就せざることを知ることが出来る。如来回向の一心帰命が、清浄願往生心と云われ、眞実信心と云われ、無上菩提心と云われるのは、それが如来の智恵、慈悲、方便の三門を全うじて成就されたる本願名号の回向によつて顕現するが故である。三種心を自ら遠離する能わざる凡夫も、この障碍を超えたる如来本願力の回向による清浄なる大信心によつて救われるのである。眞実一心は、この三種心を超えたるものである。